協同の歴史の瞬間　第110回

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」（その14）

1935（昭和10）年4月号
東助と鈴子の大塩村での生活が始まり、順調に滑り出す
1935（昭和10）年5月号
「産業組合結婚」式が挙行される

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

上田から大塩村に戻る東助の気掛かりは、母と鈴子の折り合いの問題であった。しかし、二人で戻ったその日に二人は打ち解けあい、東助は安堵する。鈴子は処女会のメンバーのみならず地域の人々、とりわけ小作人から評価されていく。

そういうなかで、巡査の佐藤敬一が「産業組合結婚」をこの大塩村で挙げたらどうかと東助に打診する。東助も佐藤巡査の提案に賛同する。

式当日は、夜八時から始まるというのに七時には式場の講堂には空席が一つもない、という盛況ぶりであった。産業組合青年連盟、青年団、処女会の会員が二列に並ぶなか、花嫁、花婿が入場して、結婚式が始まる。

「三々九度の杯」では、甘酒が用意されるが、大塩村禁酒同盟会を立ち上げた東助にとっては、当然のことであった。式は無事終了するが、処女会を代表して祝辞を述べる予定であった田中高子が書置きして、どこかに行ってしまい大騒ぎになるというハプニングがあった。

大塩村での二人の生活が始まる

兄彦吉の養父捨一の葬式がすんだ翌日、東助は鈴子を連れて、磐梯山の麓まで帰ることにしたが、東助に一つ気掛かりがあった。

東助の唯一の心配は、母と鈴子との折り合いの問題であった。鈴子は越後の貧乏な家に育ったとはいえ、長年ぜいたくな芸者生活をしていたので、質素な山奥の生活に、まったくなれていなかった。第一、村で洋服を着ている

女は、小学校の体操の先生一人で、そのほかに家庭の女で洋服を着ている若い婦人さえ見出せないくらいの地方であるから、どれくらい鈴子が、老い、かつ、病んでいる彼の母をねぎらってくれるかが疑問であった。

それを察したのか鈴子はすぐに次のように話し、行動する。

「わたし、きっと働くわよ。炭焼きでも、シバ刈りにでも行くわよ。わたしはもともと田舎が好きなんですから、きっと、おかあさんに孝行して、あなたにほめてもらいますわ」

そう言って、彼女は、上田から出るときに、木綿(もめん)の袷(あわせ)一枚と、メリンスの帯と、エプロン一枚をふろしきに包んで、汽車の中に持ってはいった。

昼ごろ上田を出た二人は、晩の九時過ぎに大塩村に到着した。

母は、東助の嫁がいっしょに帰ったと聞いて、寝床の中から起き上がってきた。鈴子はそれを恐縮がって、平身低頭して、うやうやしくおじぎをした。そして、すぐ洋服を木綿着に着換え、きたない台所へおりて、東助のためにお茶漬けの準備をした。その態度を見て、東助は安心した。

こうして上田を出るときに抱いていた東助の気掛かりは解消されたのみならず、鈴子は地域にも溶け込む努力をしていく。

次の朝彼女は、五時前に起きて、朝の炊事を一人でやってしまい、それがすむと、東助に連れていってもらって、産業組合の店の掃除に出かけた。

郵便脚夫の渡辺力蔵が、まず第一に、彼女に会った。で、彼は、配達する先々で、そのことを吹聴して回った。そのために、組合もその日は、東助の花嫁の顔を見ようとやってきた客で大入り満員であった。うれしかったのは、田中高子と鈴子が、ばかに仲よくなってくれたことであった。

田中高子は、処女会の中心メンバーの一人で、東助に想いを寄せてかつてラブレターを送ったこともあった。その高子と鈴子の間で織物、植物染料などについて話が弾んだ。

そんな話から、鈴子は、植物染料の使用法を、高子に教える約束ができた。それを聞いた大井久子も、津田良子も、そして高井米子までが、高子といっしょに植物染料の煮方や染め方を教わることになった。そして鈴子は、三日めに、ちゃんときれいな木綿縞一反を高子の家で織りあげて、組合まで持ってきた。それが村の娘たちの間に、大評判になった。

娘たちだけでなく、鈴子の評判は村の人たち、とりわけ小作人の間で高まっていく。それは貧しい人に対して、組合の店でより親切な対応をしたからであった。

「産業組合結婚」式を大塩村で挙げることが決まる

鈴子と東助の母が折り合って生活が安定し、鈴子の評判が高まってきた５月の

朝、巡査の佐藤敬一が、巡回のついでに産業組合にたち寄って、まじめな顔をして言った。

「おい、田中君、きみは結婚式を信州のほうで挙げるのか、それともこの村でやるのか？　青年団員の意向では、ぜひ、この村で挙げてほしいといっているが、どういう都合になっているんだね。ひとつ、今までの結婚式の型を破って『産業組合結婚』っていうものをやってみちゃあ、どうだね。今までのようだと、金ばかりかかって、後に借金が残るようになっているが、結婚式には組合員が全部出席するようにして、ただ、飲み食いに金を使わないでさ、小学校の講堂でも借りて、おごそかにやっては――」

佐藤巡査はそう言って、帳場の上に帽子を置いた。

「そりゃ、大賛成だね。じつは、結婚式をどこでやるか、まだそれも決まっていないんですがな。わたしを養子にもらいたいといっている鈴子の義理の母というのが、なかなかしっかり者でしてね。籍を駒井家に入れてくれさえすれば、その他のことは、わたしの言うとおりになると言ってくれているんです。ですから、青年団の有志の諸君が、産業組合青年連盟と協力して、村でわたしの結婚式をしてやろうとおっしゃってくださるなら、わたしたちも、みなさんのご意見どおりに従いましょう」

東助も佐藤巡査の提案に賛成し、大塩村で結婚式を挙げてもいいと返答した。その晩、農業倉庫設立の相談会があり、終了後の雑談で、東助の結婚式が話題となり、校長の田村直哉が村の小学校でやろうと言いだし、続いて村長の井田寛治が次のような提案をした。

「そいつはよい思い付きだ。結婚式を小学校でやり、村民の有志者が全部出席すれば、村の風儀も非常によくなるだろうし、万事に一致することができるようになるからいいなあ。そしてできれば、会費を十銭くらいとって、産業組合がお祝いの意味で、一人あたり十銭くらい足してさ、二十銭の菓子の箱を来会者に配るようにすると、非常に結構だなあ」

上田で結婚式をする予定であったものが、話は進み、大塩村でかつ日取りも六月一日と決まった。

鈴子はさっそく、電報を、上田の養母お竹のところに打った。そして、その翌日すぐ、品のよいお竹が喜多方町から貸し切りの自動車で、村の産業組合まで乗りつけてきた。

ただ困ったことは、東助の家には、畳の敷いた部屋がなかった。ひとまず、仲人を務める斎藤朝吉の家に落ち着いてもらい、田中高子と交渉して、その家の一室を借りることにし、お竹と鈴子がその部屋に引っ越した。

賀川は『一粒の麦』においても「組合結婚」について言及し、「みんなが心から祝ふ事は出来るし、無駄は省けるしさ、まあ一挙両得だ」旨の記述をしており、

「産業組合結婚」を本気で進めたかったのではなかろうか。そのことが次に見るように式の進め方を事細かに記述したのではないかと、筆者は推測している。

村の小学校で「産業組合結婚」式が挙行される

結婚式の当日が来た。

村の青年団と、産業組合青年連盟の有志者は、村長と助役の家から、まん幕を借りてきて、相当に広い講堂の三方を幕で張りつめた。そして天井には、紙で作った万国旗をぶら下げ、講堂の正面には、青年団の団旗と、産業組合青年連盟旗が飾られてあった。講壇のかたわらには、大きな花瓶にマツの木を生け、正面の扁額は、ダイズとアズキの粒で『祝結婚』の三字が表わされてあった。

結婚式は晩の八時に始まるというのに、七時には、もうほぼ村の戸主全部と、産業組合青年連盟、青年団、処女会の会員全部が参集して、講堂は一つの空席もないほど、大入り満員であった。それに、結婚式といえば、いつも見たがる村のおかみさんや子どもまでが、校庭にいっぱいになって、初夏の晴れきった星月夜を楽しんでいた。

やや長い引用になったが、多くの村人が祝福していることが読み取れる。さらに、**わしもこんな結婚式をしてほしかったなあ。これじゃあ、借金しなくとも婚礼ができるわね。これから結婚する者はありがたいこっちゃわい。万事この式でやるべえや。**とあるおかみさんが新しい結婚式のやり方を歓迎する発言などが聞かれた。

花嫁、花婿がうちそろうて、徒歩ではいってきた。小学校長の命令によって、産業組合青年連盟と、青年団と、処女会の会員約八十名の者は、校門の両側に、四十名ずつ約一間半の間隔をおいて二列に並んだ。彼等は拍手をもって、花嫁、花婿の一行を歓迎した。そんな規則整然たる訓練ができているとは思わなかったので、田中東助も、少々どぎもをぬかれた。

結婚式の司会者であった校長は、音楽の上手な教師に結婚行進曲の演奏を頼んだ。

総員は起立した。コールテン地で作った折り襟の産業組合青年連盟大塩支部の制服を着た田中東助は、仲介人（なこうど）の斎藤朝吉と並んだ。同じくコールテン地で作ったツーピースの、わずか六円しかかからない婦人服を着た鈴子は、朝吉の妻操と並んで、講堂にはいってきた。

このあと、総員起立での産業組合歌の合唱等があり、「三々九度の杯」に移る。

校長は、講壇の三宝の上に載せられてあった三つ重ねの杯を、東助の前の机の上に持っていき、甘酒のはいった赤い漆器の長柄の杓を捧げ持って、三滴ずつ三度杯に注いだ。東助はそれをうやうやしく飲み干すと、自らその杯を鈴子に渡した。すると、校長は、また三滴ずつ三度、甘酒を杯に注いだ。彼女がそれを飲み干すと、鈴子の養母お竹が、机の前に進み出て、次の杯をいただき、東助の母つゆがそれに続いた。（略）

以前見たように、大塩禁酒同盟会を立ち上げた東助だからこそ甘酒での「三々九度」であった。その後、村の助役による『高砂』の謡い、校長による餞の言葉、君が代斉唱、産業組合・産業組合青年連盟・青年団・処女会のそれぞれの代表による祝辞と続いて、式は終了する。

式が終わって、応接室に戻ると、処女会を代表して祝辞を述べる予定であった田中高子が書置きを残して、どこかへ行ってしまったといって、大騒ぎをしていた（結果として、十一時ごろ自宅に戻った）。

こうしたハプニングはあったものの二人は正式な夫婦として出発した。しかし、新婚の二人を思わぬ事態が待ち受けていた。

＜参考文献＞

『家の光』（昭和10年4、5月号）
＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』（2009年）を参考にした。